

千手堂の歴史

天平彫刻を代表する^{そぞう}塑造四天王像を安置する戒壇堂の西側に、千手堂と呼ばれるお堂がある。鎌倉時代後期、東大寺の大勧進に任ぜられた^{えんしょう}圓照上人は、その任中(正嘉元年・1257～文永7年・1270)、諸堂の造営修理に力を注いだが、千手堂も圓照上人の新造になるものである(『圓照上人行状』・『戒壇院定置』)。文安3年(1446)、僧坊からの失火で戒壇院の主な堂舎は焼失したが、幸い千手堂は類焼を免れた(『南都東大寺戒壇院略縁起』)。室町時代の古絵図には五間四方に描かれており、現在の規模に一致する(『戒壇院指図』)。しかし永禄10年(1567)、三好・松永の兵火によって焼失(『多聞院日記』)、慶長年間(1596～1615)に寺僧成秀の尽力で漸く再建された(『棟札銘』など)。平成10年(1998)5月、残念ながら火災により大きな被害を受けたが、平成14年(2002)6月6日、被災前の姿に復することが出来た。



千手観音菩薩立像・四天王立像(厨子入) (写真：三好和義)